2010年10月 No.45

司書のいる学校図書館の風景

学校図書館には子どもたちが集います。
本を読みに、学習をしに、ほっと一息つきに。
そんな学校図書館の風景を学校司書が伝えてくれました。
今回は、射水市の学校図書館司書からの便りです。

楽しいが一番だよね！

数年前、偶然訪れた公共図書館で、「学校図書館を考える会」の存在を知り、「学校司書」という職業があることを知り、「これこそ自分がやりたかったこと！」とすぐに「公共図書館司書資格」を取るために通信教育を始めた。…そしてやっとなれた学校司書の仕事。不安もあるが、毎日が楽しい。そんな私のある日の様子を紹介したいと思う。

朝、勤務開始時間の30分前に勤務に入る。子どもたちは2時間目の真っ最中。子どもたちの歌声や歓声が響き渡るなか、図書室に入る。今日は、2年生が生活科の調べ学習で使っていた。長休みに向けての準備を進めていると、「コオロギのエサは何か知りたい」との質問。今2年生全体で先日捕まえてきた虫について調べているので、先生から依頼があり、そのための本のコーナーを作ったところだった。早速、そこへ子どもを案内し、数冊本を開いてみせる。春のオリエンテーションで「もくじ」と「さくいん」の活用を伝えてあったので、そのことを思い出させる。「先生、ちがうよ。（もくじに）エンマコオロギって書いてあるよ。調べたいのは、コオロギだよ」という子ども。「コオロギ」は種類の総称だということを伝え、実際にページを開いて、写真を見せると、やっと納得してくれた。

長休み。6年生が本を借りに来た時のこと。1人が1冊の本を返すと、その友達が「それ次私借りたい」という。私「あ、それ私も気になっていた本。怖面白そうな本やよね」というと、返した子「そうそう、面白くてすぐに読めたよ」との返事。すると、別の本を借りに並んでいた6年生が「へえ、そうなん？あたしも次借りたいなー、予約しよ！」という反応。高学年はこんな風に友達同士の口コミで、本が広がることがとても多い。貸出しの時の司書の一言も、それに拍車をかける。「司書が本を知っている。その楽しさを知らせたいという熱い思いがある」ことは、当たり前のことだけれど、大切なことだと思う。私はいつも「この人はたくさん面白い本を知っているぞ」と子どもたちに思ってもらえるように、話し方に気を配っている。

戦争のような長休みが終わると、本の返却と本棚の整理の仕事。気をつけることは、シリーズはまとめること、背表紙の色使いを考慮して並べること（カラフルに見えるように）。それが終わると、掲示物を作る。図書室担当の掲示板は大きく分けて3つあり、それぞれ定期的に変えている。今日は、「中掲示板」の仕上げだ。今回は「映画になった本」の特集。掲示板のところに実物の本を並べていると、通りかかった子どもたちから「あ、これ知っとる！」などの声も。絵本などは手にとって友だち同士で読む風景も見られる。

３０分弱の昼休憩のあと、昼休みの貸出し。「長休み来れなくてすみません」と言いながら、当番の子がカウンターに入ってくる。「あ、じゃあここお願いね」と私。図書委員の当番が来てくれると、私はカウンターから出て仕事をする。主に子どもたちの読書相談。本探しや図書カード探しもする。教室に予約のお知らせを持っていったり、延滞本を回収するときもある。貸出しが途切れると、カウンター付近で、子どもたちと世間話をするときもある。放課後の時間帯にもある、この世間話タイムが結構重要だと思う。子どもたちが今何に興味をもっているのか、どんな思いでいるのかを知るチャンスだ。特に、中高学年の男の子たちとの会話は有意義な時間となる。そんなとき私は、本だけしか知らない人間ではないこと、テレビの話、歴史の話、その他雑学を少しずつ披露して、子どもたちと話題を共有するように、少しでも仲良くなるように努めている。

「本だけではなく人も好きであること」－それが司書の条件だと思っている。そして、利用者の目線に

たって考え、常に何千冊かの図書室の蔵書を背中に背負っていることを意識して、毎日楽しく仕事をしている。欲を言えば、勤務時間が長くなればいい。あ、図書館システム（＆パソコン）も早く新しくなるといいな。（おれんじかばん）

図書室は子どもたちの憩いの場

私の勤務する学校の図書室は、最上階の隅にあるため、授業合間の休み時間は図書室の近くにあるクラスの生徒しかなかなか来ることができない。(たまに、息を切らせて走りこんでくる生徒もいますが。)図書室の近くのクラスになった生徒は、声をそろえて「ラッキー！」と言っている。遠いクラスの生徒は「来年は図書室に近いクラスになりたい。」と叫んでいた。

そんな生徒たちが、昼休みにはたくさん押し寄せ、「先生お勧めの本は？」「面白い本ない？」「テレビで人気の〇〇さんの本入ってないの？」など質問攻めになる。また司書は、図書室内で鬼ごっこを始める生徒、歌を歌い始める生徒がいないか、図書室の隅々まで目を光らせていないといけない。昼休みは図書委員が２人づつでお手伝いに来てくれるが、なれない仕事のため言われたことがしっかりできない生徒、おしゃべりをしにきている生徒など、個性的な生徒も多い。そのため、図書委員からも目が離せない。図書室の昼休みは戦場だ。

昼休み以外でも、教室にいられない生徒や抜け出した生徒が授業時間中にフラリと図書室にやってきたり、「あー！！腹が立つ！」とストレス発散をしていく生徒、愚痴を漏らす生徒もいる。そのたびに、仕事の手を止めて「うんうん。」と話を聞いている。聞くことで生徒のストレス解消になるならばと思うが、そのたびに図書の仕事が少しずつ遅れるのが痛いところだ。

そのために、突然やってくる生徒の相手もでき、かつ仕事をスムーズにすすめるため、図書室内のパソコンは必要不可欠なものだ。バーコードでの貸出返却ならば、生徒でも操作が覚えやすく間違いにくい。また、資料の検索はもちろん、生徒からのリクエスト本の内容や図書室にない本の予約が入ったときなどに、ネット検索もすぐにできる。図書新刊案内便りや本の紹介などの作成も図書室を離れることなくできる。（印刷もしかり）なので、図書室のパソコン＆ネット＆印刷機は必需品だ。

（ニッポンのアラサー）

すすまないことと培ってきたこと―すべては子どもたちのために―

司書の資格を持っているというだけで、深く考えずに学校司書になってずいぶん経ちました。何もわからない手探り状態から今までやってきましたが、日々子どもたちと接することのできる仕事に喜びを感じています。

ただ、この数年のうちに市町村合併があり、一口に学校司書といっても、各市町村での仕事のやり方、仕事に対する考え方に相違があり、合併前と同じような仕事をすることが困難になってきていることを残念に思っています。相違を埋めていくためにも、研修は必要だと思っていますが、その研修時間も減らされていくばかりで、歯がゆく感じています。また、5 時間・時給 800 円の勤務内容で働いているため、経済的な理由から優秀な司書が辞めていくという悲しい現状もあります。

しかし、射水市の学校司書で毎年作成している推薦図書リスト「心に種まき読書の木」（100 冊）も徐々に根付いてきて、子どもたちの読書活動の一翼を担っていると感じていますし、司書がいる図書室を、子どもたちは活発に利用してくれています。読書や調べものだけでなく、涼みに来ておしゃべりしていくツワモノ（？）もいますが、それだけ図書室は気軽に使える場所になったのだと思います。

自分のできることには限りがあり、私たちの置かれている状況も万全とは言い難いのですが、地味な読書活動や調べ学習を支え、子どもたちのために少しでもよりよい学校図書館をこれからも作っていきたいと考えています。

（モモ）

研修があって良かったあ～

私は、子どもの頃から本が好きで、大人になったら本に関わる仕事がしたいと思っていました。図書館司書になろうと思ったのは高校１年の時です。先生から、図書館司書という仕事があると聞いたからです。

私が学校図書館司書になった当初、勤務時間は１日５時間と聞いていたのですが、実際に働いてみると、仕事内容がとても多く、５時間では時間が足りず、仕事がたまる一方でした。また、先生から急ぎの仕事を頼まれ、遅くまで残っていたこともありました。

はじめの頃は、本のことで質問されたら答えられるか心配でした。そこで、少しずつ図書室の本を読んでいくことにしました。そうすることにより、どこにどんな本があるか、どの本にどんなことが書いてあるかわかるし、自分なりに面白い本を薦めることができるようになってきました。

また、毎月行われていた司書研修では、司書しか分からないことで困ったことなどを相談して、アドバイスを受けることもできました。レファレンス交換やブックトークの研修では、自分の分からないことばかりだったので、情報収集の点からみてもとても勉強になりました。研修をしていくうちに、少しずつ不安は消えていきました。

仕事に追われながらの毎日でしたが、この仕事をしていてよかったと思う時があります。それは、子どもたちが楽しそうに本を借りていく時です。私が学校図書館司書になって一番うれしかったのは、数年前、図書委員だった６年生の男の子が、将来の夢に「図書館司書になりたいです。本が好きで、多くの人にいろんな本を紹介できる素敵な仕事だからです」と書いてあったのを読んだ時です。改めて学校図書館司書になって良かったなと思いました。

学校図書館司書は１校に１人しかいません。司書にしか分からない悩みもあります。そんな時、今は年６回しかありませんが、昔のように毎月１回の司書研修会があるととても助かります。毎月行われることにより、より新しい情報を得ることができ、授業での資料提供にも迅速に対応することができるからです。これからも、授業に役立つ本をたくさん提供していけるように、また、学校図書館を利用するみんなの憩いの場となるように、がんばっていきたいと思います。　　（みいちゃん）

かわいい子どもたちに囲まれて…

もともと読み聞かせや紙芝居などに興味があり、以前はよく子どもを連れて、聞く側として楽しんでいました。ところがある日、地元の小学校の朝の読み聞かせ会にピンチヒッターとして参加したことがあり、そのときの子どもたちが集中して真剣に聞いてくれた姿にとても心を打たれました。以来、もっといろいろな本を広く子どもたちに読んであげたいという思いが強くなりました。その後しばらくして、縁があり今の職に就いています。

子どもたちは本当にかわいいです。返却の時カウンターにまだ背が届かず、ほぼ手と本だけが見える状態で、小さな手を一生懸命にのばす１年生の女の子。ほほえましいそんな一瞬が、私にとってとても幸せです。その一方で、自分が本当はすすめたい本と子どもたちの実態の違いに悩んだりもします。子どものころ親しんだイソップやアンデルセン童話をもっと読んでほしいと思っていて、どうやってすすめようか現在思案中です。そんななかで、今おすすめの本は『ぼくのかえりみち』(E　ひがしちから作 BL 出版　2008 年)。私が小学生のころ、主人公と同じような遊びをしたことがあり、懐かしく、子どもたちにすすめながら「わたしも小学生のころにね…」などと話してあげられたらいいなと思っています。

（リトル）

図書館見学記

見てきました！図書館王国・滋賀

（事務局　江藤）

今までにも何度かご紹介しましたが、全国の学校図書館の動きを伝えている「全国の学校図書館に人を！の夢と運動をつなぐ情報交流紙　ぱっちわーく」の２００号記念座談会に出席するため、今年１月に岡山へ行ってきました。終了後、京都から普通列車に乗り換えて、公共図書館先進地・滋賀県の３つの図書館を見学してきました。琵琶湖の東側を北上して行ったわけですが、特色ある図書館の充実ぶりと滋賀県の広さが実感できる、普通列車９時間の旅でした。

公共図書館先進地・滋賀県の経緯

２０世紀末の日本社会は、戦後の高度経済成長によってもたらされた富により、全国的に大きな文化基盤の整備を目指しました。滋賀県は、1972 年に「文化の幹線計画」を策定しています。そのなかで図書館、美術館、博物館、文化会館を順次整備していくことと、そのサービスを琵琶湖の回りのどこに住んでいても享受できるよう、図書室、展示室、ホールの機能を持つ文化芸術会館を県立の施設として配備していくことを謳いました。この計画に基づいて、５つの文化芸術会館、県立図書館新館、美術館、博物館、ホールが次々と整備されていきました。「文化の幹線計画」が策定された 70 年代前半の滋賀県の自己評価は、「文化後進県」というものであり、それがこの計画推進の原動力となったと言われています。

しかし、「幹線計画」における図書館の位置づけは、決して十分なものではありませんでした。そこで 1980 年、当時の武村正義知事によって前川恒雄氏が日野市から滋賀県立図書館館長に迎えられました。このとき滋賀県には図書館は４館しかなく、あらゆる図書館に関する統計において日本の最下位付近を低迷していたということです。前川氏が指揮を執った県立図書館は、非能率的な移動図書館を廃止し、巡回車を使って、リクエストされた図書や県の刊行物などを県内の図書館に運ぶことを始めました。県立図書館と次々に新設された市町村図書館の館長が、アドバイザーとして大いに活躍したため、図書館整備の補助制度（滋賀県では、1998 年まで市町村図書館建設補助金と６年間の図書購入補助金制度が設けられていた）が有効に働いたと言われています。

市町村図書館はお互いに助け合い、サービスの姿勢を高め、ユニークな文化的催しを企画して、市民に喜ばれていきました。一つが成功すると後から造る市や町がそれに倣い、1975 年に設置率４％だった滋賀県の図書館は、2000 年には 72%になるという速いスピードで整備されていったのです。さらに滋賀県立図書館は、早くからコンピューターで資料を検索できる仕組みを構築しました。これは市町村図書館への貸し出しを容易にし、要求された資料を週一回車で配送するネットワークが全国に先駆けて実施されました。滋賀県の図書館の現在の隆盛をみるにつけ、図書館長が経験豊かな司書であることや司書を専門職として採用したことがいかに大切なことであるか、また不可欠なことであるかを示していると思われます。

前川恒雄氏の業績

前川恒雄氏は、日本の公共図書館がまだ学生の勉強部屋程度にしかみられなかった時代に、『中小都市における公共図書館の運営』（中小レポート）の作成にたずさわり、日野市立図書館長として“市民のために役立つ図書館”という新しい概念を実証された方です。さらに、日本における市立図書運営のバイブルともいうべき「市民の図書館」をまとめあげられ、国の図書館行政の根幹の一つである図書館法第 18 条「望ましい基準」の公示にもかかわられました。1980 年に招かれて滋賀県立図書館長に就任した後は、「中小レポート」ではまだ不鮮明だった都道府県図書館の具体的運営を展開し、県立図書館と市町村図書館が共同して県民サービスを推進する図書館王国を築かれました。こうして、市町村図書館と県立図書館が一体化した、

当時の段階における県レベルの公共図書館運営のあり方が初めてデッサンされたのです。日本における公共図書館運営の理論的・実務的全体系の骨格が、ほぼここでまとめあげられたとも言われています。

前川氏は、著書『新版図書館の発見　日本放送出版協会』で、「司書は採用されて３年くらいたって初めて一通り仕事がわかり、するべき失敗もして、一人前の司書となる。それから、カウンターで利用者に接し、書棚で本に触れる年輪を重ね、本がわかり、人がわかるようになってくる。本がわかり人がわかれば、本にも人にも謙虚になる。そうして先輩が積み重ねてきた蔵書や仕事の蓄積を理解し、そのうえに新しい本と仕事を重ねていく。図書館の仕事は長年にわたる積み重ねで成り立っている」と、司書の仕事は経験の蓄積が何よりも大切だと述べられています。滋賀県の図書館の評価の高さは、その点をもっとも重要視された結果なのだと思いました。

見学①：栗東（りっとう）市立図書館

栗東市内には、もうひとつ「栗東西」図書館があります。滋賀県の図書館はマスコミによく取り上げられますが、それだけでは見えてこない、「図書館王国・滋賀県」の底力が感じられる誠実な図書館でした。図書館は常に手を入れなければ腐ってしまう「ぬか床」だという表現があります。そんな利用者の視線に立った日常的な整備がきちんとされていることが分かり、「ああ、ここに毎日来て本に浸っていたい」と思うような居心地の良さを感じました。

建築から運営に携わられた竹島昭雄氏は「図書館界　57 巻 5 号　日本図書館研究会」で「私たちは図書館の発展を願って遠い目標を定め，今何を為すべきか判断しながらサービスを行っている。この遠い目標と今の仕事を支えているのは，『自分たちは何のために働いているか』という使命感である。指定管理者制度の導入は，この目標とともに使命感さえ奪ってしまい，発展のための根幹を失わせるものであるといってもよい」と述べられています。その他、いろいろなところで図書館振興策や専門職制度についての意見を熱く語っていらっしゃいます。

見学②：東近江市立図書館―能登川図書館

東近江市内には、能登川図書館の他に６つの図書館（八日市・永平寺・五個荘・愛東・湖東・蒲生）があります。元日本図書館協会理事長の竹内悊氏が米国の図書館のポスターの「自殺をしたくなったら図書館へ行こう」というフレーズを紹介されましたが、これを聞いて、開館以来 2007 年までの約 10 年間、館長を務められた才津原哲弘さんは「これこそ、僕のやろうとしたこと。図書館に一人一人の居場所を作りたかった。ぶらりと立ち寄ることができて、人生のリセットができる場所を」と、思われたそうです。そのためでしょうか、能登川図書館は、開放的な高い天井にはタペストリーが随所にかけられており、背丈ほどの書架が意図的に見通し悪く配置され、いたる所にカウンターから見えない死角があります。どこかの一角で椅子に座ったら、あっという間に自分と本だけの世界が作れそうな気がしました。

2007 年 12 月の読売新聞のインタビューで、才津原館長は、年間１万冊の利用を 30 万冊に増やせた理由を「何かを知りたいと訪れた利用者を、手ぶらで帰さない態勢を整えることです。それには絶えず良い本をそろえ、利用者の関心に応える必要があります。能登川図書館は毎年、約１万冊の本を購入してきました。図書購入の予算を付け、本を選ぶ職員をきちんと配置する。これに尽きます。」と述べられています。また、図書館の職員の役割については、「年間７万冊もの本が出版されており、１人が読める本は限られています。責任を持って本を選ぶ力は一朝一夕ではできません。本と利用者に継続的にしっかりと向き合う。その経験の積み重ねが本を選ぶ力を育てる。そこに人件費として予算を投ずることは、図書館を生かすことにもつながります」とも語られていました。

見学③：長浜市立図書館―高月図書館

長浜市内には、その他５つの図書館（長浜・浅井・びわ・虎姫・湖北）があります。井上靖の小説「星と祭」に書かれている湖岸の十一面観音像が縁となって、1993年に井上靖記念室を伴う町立図書館がオープン

しています。図書館に入って、すぐに目を引くのは特色ある本の配架の仕方です。ＮＤＣの０～８門で一般書と児童書が「混配」されています。つまり、子どもが見る図鑑と大人が読む専門書が同じ棚に並んでいるのです。

明定義人館長は著書の『本の世界の見せ方　六夢堂ブックレット』で、「混配するために、児童書は３～５桁の分類に修正し、シリーズ物は主題ごとに分類しています。３桁までにすると、昆虫は４８６でひとかたまりになってしまいます。また、セット・シリーズもまとめてしまうと、カブトムシがあちこちにあるということになってしまい、シリーズを知っていないと探しづらくなってしまいます」「（混配置）が大人を馬鹿にしているという意見もありましたが、実際はそんなことはありません。子どもにとってよくできた本は大人にとっても良い本なのです。一般書と児童書の区分は、出版社や図書館の側でのとりあえずの区分であって、読む人の側はそんなに気にしていないように思います」と自説を述べられ、新しい試みの実践を積み重ねておられます。

・・・

滋賀県の３つの図書館を見学して感じたことは、何といっても各館長を中心とした司書の方々の図書館に対するクリイエイティブな熱意です。前川氏が蒔かれた「市民のために役立つ図書館」の種子が、多くの関係者の真摯な取り組みの中で、着実に根付いたのだと感じました。そして私は、図書館は利用する住民が有形無形の思いを伝え、司書がその思いを大切にすることで形作られていく、他の公共施設にはない魅力にあふれた場所だと改めて思いました。

砺波市で、学校図書館に関する先進的な講演会が開催されました。

会報№.４３の（財）文字活字文化推進機構と毎日新聞社主催のフォーラム参加報告で紹介したスーパー司書教諭の塩谷京子先生が、８月１２日（木）に砺波市立図書館主催の講演会の講師として来県されました。「学校図書館支援と活用」というテーマのもと、学校図書館を活用した“調べ学習”を進める際の指導方法を学ぶ講演とワークショップが行われました。大変に意義のある楽しい講演会だったそうです。参加された方による感想は、次号に掲載の予定です。

県内で、学校図書館充実への気運がもっとも高まっている砺波市で、学校現場と公共図書館が協働しての試みは、大変に先進的です。今後も砺波から、様々な発信をしていただけると期待が高まります。

小矢部市で、すばらしい「子ども読書推進計画」が策定されました。

先の会報でもお知らせしましたが、小矢部市では、考える会地区委員も参画された策定会議を経て大きな前進が期待できる推進計画が出来上がりました。小矢部市では平成１４年度より全ての小中学校の図書館に学校司書を配置されています。けれども大規模校は専任ですが、小中規模校は２校兼務です。そこで平成２１年に策定された「小矢部市子ども読書活動推進計画―本となかよしおやべっ子」には、「各学校の実態やニーズに応じた業務を行い、『図書館へ行けば、いつも学校図書館司書の先生に対応してもらえる』と、子どもたちが安心し、充実した読書活動をつくるため、学校図書館司書の１校専任配置を目指します」と明記され、教育現場の充実に向けての整備が始められました。未来を担う子どもたちの最善の利益を保障したいと考えられた小矢部市の見識の高さを感じます。

今年８月の小矢部市議会議員選挙で、全ての候補者に推進計画の早期実現をお願いする手紙を郵送しました。

講演会は 2011 年３月１９日（土）午後です。

２００９年度に富山市の中学校と高校で共通して、もっとも読まれた作品の作家は７人に絞られました。そのうち電撃文庫「キノの旅」の作者、時雨沢恵一氏が、富山の中高生に会いたいと言ってくださいました。夢のような幸運な講演会が実現します。チラシを同封しました。ぜひ、ご参加ください。